

これ以上殺られつけないために、俺たちの生命は俺たちで守ろう！

いのち

編集発行 釜ヶ崎医療を考える会

もくじ

まえがき	p.1~
俺達の生命は俺達で守ろう (月刊地域斗争72年11月号マス701)	p.2~
〈寄稿〉 怨念と風俗の生活の総体を熱いダイナマイトに…… 虎ヶ崎次郎	p.8~
《活動報告Ⅰ》 報復=救援の隊列を整えよう	p.12~
《資料Ⅰ》 新聞記事から	p.17~
〈座談会〉 自らの立場にこだわりつづけて……	p.21~
《資料Ⅱ》 医療ニュース 大和中央病院患者新聞他	p.33(頁1)~

第2号

釜ヶ崎医療を考える会
1972年11月10日発行

批判を！ 意見を！ 次号への投稿を！ 教えて下さい 送って下さい

基本定価 30円

いのち 第2号 1972年11月10日発行

編集発行 釜ヶ崎医療を考える会 (編集 K&N, 印刷 N&I+全頁)

連絡先 大阪市西成区東田町4-4 電話(06)631-2383(12c~20c,毎日)

まえがき

私たちは、ちょうど三か月前にパンフレット『いのち』創刊号を発行しました。

もうこれ以上殺られ続けられないために公権達の生命は我等で守ろうと活動を始めました。私たちですが、「要するにどうすればいいのか」がまだはっきり掴めていません。

目の前の山の大きさに圧倒され、頂上がはっきりみえず、従って道と登り口も定かではないのです。こんな状態を反映して、創刊号に対する意見も「全体としての路線がはっきりしていない」というのが多かったようです。各メンバー間の結合環（人間関係）も、なれあい関係であり、従ってへ対立を明確にするなから・腹の底からの団結をつくりあげることを実行できませんでした。また、頂上がみつかっていないため、個々の人民の立ち上りを、頂上に至る多様な・無数の・道として承認することもできず、ただただ「できることからやるうへ色々あらあね」式になってバラバラでした。これも具体的な積み重ねをスツとばして大言壮語する人たちよりはマシと思いますが、やはり方向をみつけていかなければ、前進しているのかもわかりません。

そこで、こんどの号は、隊列を整え強化することへ対立をはっきりさせることを通じて団結することと重点をおいて編集しました。ここに、私たちの発展の一過程として出るので、みなさんの批判をお願いします。

一九七二・一〇・二九

『いのち』編集人

小林美伸／中原哲也

2.3 頁 欠

らない。

友人諸君!! 以上の呼びかけに答え、今すぐ、共に行動を開始する様、そしてあらゆる協力を訴えたい!!

※なお、引き続き、仲間を「じゃま者」

「用なき者」として隔離、管理するためではない精神病院——釜ヶ崎からは、ほとんど泉南に集中する各精神病院に送り込まれる。

「鬼の安田か蛇の国分(病院)……」などといわれる——の実態!!入院患者追跡調査をやっていた。また「犯罪」という形で「怒り」を負ける方向に爆発させ拘置所刑務所にぶち込まれた人たちの調査もやりたい。「彼らの立場に立ち「苦しみ、くやしき、怒り」を共有して」やっていきたい。以上

呼びかけ人有志

〈連絡先〉 大阪市西成区東田町44

釜ヶ崎医療を考える会

06 六三一—三三八三

行路病死者は、路上で、現場で、あるいは、病院で、社会の片すみでどんな気持で死んでいたのか。それらの死者の扱いは、死人を釜ヶ崎内の道路でむしろをかけたまま長く放置しておいたので、労働者が、人間らしく扱えと騒ぎ出し、暴動になった事もあるという事実のみをあげても明らかであろう。前記の三例においても調査のあいまいさ、一例において、病院で死んだのに、死因すら記されていず、Ⅱ例のごとく、阪和、大和中央と並ん

でよく警察病院へ連れていかれるのはなぜか。行路扱いでも、入院中、知人が来ると待偶が違うのはなぜか。彼に身寄もない事がわかると、病院は、彼を殺して、(少なくとも、いい加減な扱いをして、その結果死に至らしめる)医学実験材料にし、この社会から、よけい者を抹殺するのである。もう少し、昨年の越年闘争に照らしながら書いてみよう。主として阪和、大和中央病院へ行つたわけであるけれど、病弱であるのに、文無しだから出ていけと、ドヤを追われ、路上に倒れていたたり、無理して酒を飲んで肝臓を悪くして倒れ強盗)に身ぐるみはがされ、おまけに大けがをし病院へ運ばれてくる人が多かった。救急車の世話になった人も、ほとんど、人殺し病院にブチ込まれる。そして、三分の二位は、三日以内に自己退院か、強制退院で出てくる。結局よけい体を悪くして死ぬ人もあろうし、又病院に運ばれる人もある。少数の医者、ほとんどみてくれず、多くのガードマンに痛めつけられる。我々は、わずかばかりの古着、洗面セット、連絡用はがきを持っていき、体がよくなるまでがんばって下さいというより他なかった。そして、その中から、病院を追い出されたり、殺されたりするのを想像しながら。まだ、我々には、自分の力でする何ものも持ち合わせていない。できるだけ利用できるものを頼みにしながら、人間のきずなで結びつくより他ない。さりとて、専

門家と行動する事も好まない。一人、又一人と殺されていくのを見ながら、本当に証拠をつかまなければと思う。そして、これから、その全面的調査を開始しようとしている。より具体的に、その人個人との結びつきにおいて、お互いの全面的協力によって。しかし、単なる医療関係への責任追求ではない。ポリ公になぐられて死ぬ人もある。それが暴動であつても他の闘争での死とは全く違っている。機動隊が包囲する西成署裏門より死体を入れて、(他の人間は、彼の友であろうが親であろうが入れない)バトカーでどこかへ運び去る。それが軽かったら、偶然阪和病院等で会う事もある。そういう人は、ほとんど、暴動とは、無関係の人達である。警察への抗議、行政への要求。これらのつきつけの中から、行路病という名の殺人の社会的責任を追求していきたい。(行路病とは、病気の名前でなく、金のない身寄のない人を保険扱いにするための病氣一般である。しかし、常に福祉という美名は毒を持っている。わずかばかりの援助で、飼ひ殺しの目にあわせ、あげくの果ては、殺人の自由を持っているのだ)

更に我々は、精神病院の問題をつけ加えなければならぬ。なぜなら、これは、釜ヶ崎労働者全般の問題として、大きくクローズ、アップされる問題だから。全国でただ一つの反乱は、釜ヶ崎に残されている。それらの反乱を警察当局は過激派と酔っぱらいが起こすものだと思っているらしい。活動家もデッチ

5頁分

ある日、たびたび病院から手紙をくれていたMさんが泉州病院で、病院の圧力にもめげず、ひどい監視の病院の生活改善要求闘争を見事に勝ち取った。そして、一緒に闘った人の中に越冬のテントにいた人がたくさんいるというのだ。精神病院に、その連中がたくさんいたという驚きと共に、胸があつくなるのを覚えた。これが僕の最初の喜びである。Mさんは、今も、釜にいて、元気にやっているし、僕は、これを大事にしまっておきたい。それから、光洋工業で働いていたSさんが病院で死んだ。Sさんの出舎にいて事情を

医療を考える会結成について

釜ヶ崎医療を考える会結成のきっかけになった具体的な事例を説明することからはじめたい。

1 越冬対策医療班で発行した連絡はがきがきっかけで、正月、救急病院H病院に入院した釜ヶ崎労働者Mさんと連絡を保っていた。ところが、彼から、H病院からS精神病院に送られたとの連絡が届いた。

その時の手紙の抜粋を紹介する。

「私は病院生活H病院と此処の二回目で、すが、此処へ来てから病気がいっそう快復せず、動物園の猿同様の日々を送っています。

聞いたりしたけれど、病院の閉鎖的な門の前に立ちつくし、死因がわかっただけで、それ以上どうしようもなかった。重みのある教訓であった。

五月十四日、三角公園で健康診断をやった。簡単なわかり切った事しかできず、病気の人をどうする事もできない。学生の資料集めぐらいの意味しか持たないとその時は、まくを閉じた。個別の問題から、大衆の問題になるとすぐにこのような限界がでてくる。それから、民間医療、大衆療法について話をしたが、まだこれからという事。

以後再び試行錯誤の時期に入る。一応今までの経過をまとめておこうと、『いのち』創刊号が出たのも、つい先ごろである。

(文責 F)

『いのち』希望者は 大阪市西成区東田町44
釜ヶ崎医療を考える会まで(50円)

れども、かなり改善されたようだ。

それからしばらくの期間で、彼は比較的スムーズに退院できた。(彼が医療ニュースによせた投書—五月一日号—参照)

2 二月の中旬、釜の労働者が一人病院で死んだ。救急車で、西成のある救急病院へ運ばれて三日後、それも精神病院のことである。彼はSさんという行路病者であり、入院の次の日、精神分裂病と診断され某精神病院へ転院、その次の日の朝死亡したのである。

死亡診断 食道静脈瘤破裂、肝硬変、酒精中毒

釜ヶ崎労働者への差別と偏見を根底に、腐敗した医療によって釜ヶ崎労働者は殺されていく。その責任を追求する為、Sさんの死を無駄にしない為……労働者数名が決起し病院への徹底追求を試みた。数回集会をもち、Sさんの家族と連絡をとり、病院に経過を調査にいった。

家族の手紙抜粋

「病院でできた経過はつぎのとおりです。Sは一四日午後六時頃前の病院から移送され、翌一五日朝七時五分に亡くなった。由。病名は、食道静脈瘤破裂、肝硬変、酒精中毒との事でした。入院時は大分重体で忘想的うわ言を云っていたが苦痛は訴えなかった由です。S精神病院でも一晩だけの事であり詳しくは解らないとのことでした。丁度亡兄の友人という人が、家族がこなければ骨を拾ってくれる心積りで来たといひ、病院でお会いしましたが、この方の言で『前の病院の院長先生が誠意がなく、死亡についても納得がいけない』と言ひ、これから前の病院へ行っているといひ、きいてみるよう助言してくれましたが、私も悲しみに加えて、前夜からの徹夜運転の為、大変疲れており、また、市内不案内にて道も迷ってしまう心配がありましたので、すべては寿命とあきらめることにしてそのまま帰宅し翌日さやかな葬儀を行つた次第です。」

家族の方は、右のよう、長年連絡を断つ

た兄弟、葬儀は行なっても病院と闘うほどのものはもてない。病院では、家族以外には話せない医療法をたてにとり口を閉す。我々はもう何をやる術ももたない。

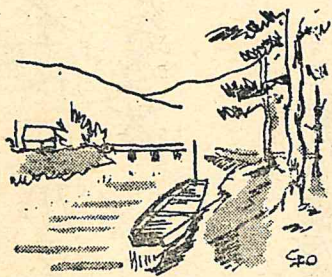
しかし、これが釜ヶ崎労働者の実態なのである。身寄りもなくみまいにくく人もなく相談する人もなく、その為に、病院で何がころうと何をされようと、殺されてしまえば死者は語らず、病院はゆうゆうともうけつづけることができる。

年間三〇〇名以上の人が路上で死んでいく釜ヶ崎、それでは幸運にも(?)病院にはいられた人は? Sさんの死は、鮮明に、病院の実態を暴露している。

アル中という診断で警察から精神病院へ、そして精神病院の実態は、Mさんもいっているとおと、又、昨年の泉ヶ丘病院の事件をみても、ひどさが推測されようというものだ。その上、あれ程さがれつつも実際内部で何がおこっているかさえつかみようのない、全く隔離された精神病院が数知れず存在する。全く明るみにされずして、釜ヶ崎労働者は殺されていく。

いったい結核の人が何人いるか、肝硬変を絶対安静の必要な人が何人いるか、病院から強制退院で追い出され、骨折が直りきれずにいる人、腰痛症をわずらったまま仕事を続けざるをえない人、そして労働災害の認定すらできず、使いすてにされてしまう労働者。

現在の腐りきった医療は釜ヶ崎のこのよう



(「いのち」より転載)
(谷川啓子)



からレコして死んだ。仕事が皆無の正月をめぐる厳しい冬を生きのび、ようやく仕事もチラホラと出はじめ、これぞツレにお返しができる、飯場に入つて間もなかつた。

夕子は一冬ツレに面倒を見て貰つて、飯も食わず、悪い酒を飲みどおしたつた。

解剖の時、胃袋は裏奥を放つていたそうである。

夕子は死ぬ間際、自分が沖繩出身であると初めて名をあかした。

夕子は「負い目」を感じていた。そしてまた「罪の意識」を持っていた。

夕子の死は、夕子の死ぬ間際の意識からみて、故郷の夕子に連なる人々への「しよく罪」であつたろう。

なる程、帝国主義は沖繩を肉体だけではなく、頭脳さえもこういう風に支配するのにか？

III

私はと言えば、また、長い間「負い目」を持って生きている。おまけに「罪の意識」をしょいこんで。

やりきれんのお。

ところで、私は何について「負い目」を持っているのだろうか？

いつもそれは漠然として不確定なのだが、恐らくそれは、私が人々の期待を裏切つて生きてきたからだろう。母親に始まり、出会つてきた人々の大半を。

市民社会の価値基準から、私は過去種々なレッテルを貼られた。⁽⁹⁾

そしてそのレッテルどおりに、私に連なる人々の大半が、私によつて「不幸」にさせられたという意識を持っている。

それは耐えられないことだ。

しかし今、私は、「負い目」だの「罪の意識」だのという意識が、制度によつて与えられたものである、

とを知っている。制度は肉体だけではなく、心を支配するということ、「罪の意識」を持つことによって制度は正当化され、支配は完成されることを知っている。

そのため、人々が私を恨めば、それだけ私は制度を憎むようになった。私の頭脳は急進化し、妄想はふくれあがり、爆発しそうになる。

帝国主義市民「秩序」の「平和」に耐え切れず飲みまぐった状況から一歩進んで、むしろ頭脳の爆発を抑制するために飲むという悪無限の廃人のコースを、敷かれたレールを歩いていく。

なるほど。

永山則夫が「改心」した時には出るに出入れぬ死刑囚というやつだ。敵は目覚めた無数のアル中・乱暴たちが「負い目」や「罪の意識」を断ち切って斗いはじめるとき、武器としての肉体すらも収奪しているのか？

丁

十一三

そのような調子で片付けられるのを知っている。

労働現場での死は、それでも丁寧に埋葬される。だが、われわれの死体に如何ほどの意味があるう。

私は知覚する。

われわれの肉体が次々にボロボロになってゆくのを覚える。

われわれは一生涯にわたるアシュラとして、肉体を、感性を、奪いつくされ、やがて廃人となるのだ。

現在、若い諸君はいずれ年老いてゆけばわかるだろう。われわれの客観的未来が野たれ死に以外ないことが。

われわれはやがて武器としての肉体すらも収奪されるのだ。

Ⅵ

私は、私の基本的心情が、おとなしく野たれ死にしたいくないこと、そしてそれがタイトルの妄想で今にもおしつゝみそれさうであることを告白する。

Ⅳ

状況は少しも急進化せず、頭だけが急進化するとき、それが状況の総体を急進化する武器の政治を構築する方向へではなく、行動に駆化されるや、みじめな結末が行手に待つ。

私は、無数のわれわれが一人一人ひきはがされて「犯罪」のレッテルを貼られ刑務所か精神病院のどちらかに隔離されるのを見ている。

私は、夕子が反抗の表現すらもせず現場で死んだこと、それは明らかに冬、仕事のない状況が夕子の肉体をボロボロにしたこと、凍死と何ら変わらない死であると考ええる。

Ⅶ

われわれの現在は無量であり、われわれの未来もまた暗黒である。

私は思っている。われわれの死を知っている。暴動の最中でたたき殺されるのはまだいい。ドヤのベッドで公園のベンチで、われわれの死体がまるごとゴミを処理

それは、われわれの現状打破への願望が、強烈であり、ラディカルであり、どこにも私の妄想を満たしてくれるような急進化された状況がないことを意味する。

私は過去、何度もチンケな「犯罪」でパクラした。

私は、われわれに敵対する制度が、私の妄想に關してすらもイチャモンをつけて来るのを知覚する。

私は、対極にひき裂かれた頭をかかえて、いつもいらだたしさを覚える。私は、もう一つの現実思考を忘れ、妄想のみを想いながさ救われる人々を天獄の囚人と呼ぶ。私は彼を三和親主義者と規定する。そして更に、妄想を想いながくこともなく、ただ、現実思考の名の下に制度と交渉する人々のことを社民と呼ぶ。

私は不条理を遊ぶ。

天獄の囚人たちは、現実から裁かれるであろう。

社民たちは革命から裁かれるであろう。

私は、廃人の道を歩みながら、われわれと一緒に、野たれ死ぬ前に斗い続けるだろう。そして野たれ死ぬかも知れない前に、脳漿が爆発するかも知れない。

どちらにしても私は、既に罰せられた存在である。

(つづく)

へ活動報告 I 行路死者調査について》

報復II救援の隊列を改正えよう

——これ以上殺られ続けないうために、仲間^やの死の具体的な調査を。——

I

去る九月二〇日から同二六日まで(彼等の期間)、大阪市内四天王寺境内龜の池前で、大阪府警鑑識課による無縁仏(身元不詳死体)の調査が行なわれた。係員総出で、「家出した息子」「蒸発した妻」を捜す人の相談を受け付け、ひなりにぎわっていた。

私たちの一人が、二四日、フラッと見に行き、仲間の死をへみ見て死者の抗議の声をきき、彼らの立場に立った調査(死者あすの死者をも含む)が声を上げる、そして、生きざまをさらしあうための条件を作りだすことの一環として、資料をつつしとろうと決意する。しかし、「プライバシー」の問題とやうに阻

仲間^やの死の具体的な調査を。

まれ、引き返す。彼らは、路上、飯場、ドヤでへ殺された仲間への怒りをバラバラにし、封じ込めようとする。プライバシーの論理とは、人民の怒りをバラバラにし、共有しあうことを妨げるブルジョア論理なのだ。彼は、死者と共に同日呼びかけ、仲間と討論をもち組織的に警察に奪われた資料をとりにかえすことを決定。肉身を奪われた人民の「相談」を、殺人犯の手先である奴らが受けつけることを許してはならない。

怒りの結合II我々の集約を。生かされずに、バラバラに宙に舞う死者の怨念が日本中渦巻いている。

II・III

《資料》《呼びかけ文》略 前二・四ページを参照して下さい。

IV

資本家が「専門家」、学校出に指示して勤労人民の諸能力を制限、抑圧する、という今の世の中の支配形態が多様にあられるのと同様、我々の「野に死に」も多様な形であらわれる。

社会のしくみをみることができるのは「頂点」から「最底辺」などどちらかであり、我々の調査は主に後者——労働者同士、仲間の死と救援——報復について語りあうこと——であり、九月に行なったような「調査」は主要ではない。我々は、それから学んだが。

肉体までも殺られた仲間のうち身元が判明するものは多くない。指紋照会の結果、ふるさとへ辺境、農漁村へ追われ、町に出てきたが、再び絶望のどん底におとされ「前科者」になった仲間だったこともある。沖

縄、辺境農村出身者、在日朝鮮人の兄弟も多い。

路上で、公園で、青カン（野宿）して凍死——特に十二月～二月に集中する。「市民」が「正月」を、一家団らんを楽しむ時、仕事が終わった後、減りアブれる仲間が多くなる、飯も食えず、ドヤ、銭が払えず、たき火をかこんで夜を明かすには、冬はあまりにも長く、厳しく、寒いのだ。

酔っぱらってたき火の中に倒れ込み、また電車でひかれ……。

ドヤの一室で、仲間や管理人、そうじ人に、毛布をかぶったまま死んでいるのを発見されることもある。病死、自殺のほか死因のはっきりしないものも。

また、死の場所は、路上と共に、阪和病院が多い。我々の仲間の多くが送り込まれるこの救急病院こそ、殺人病院の典型である。前記《資料》の「状況報告」に「治療中」とか「加療したが」などと記してあるのは、白々しいのを通りこして腹立たしい。くやしい。

釜ヶ崎は、巨大な無医地区であり、中更相、医療セ

ンターをはじめ、医療から飲酒却下、強制退院によって労働者は排除され、そして、幸いにも「医療」にかかる、そこには合法的殺人があるのみだ。

V

下層人民——釜ヶ崎をはじめ各地の下層肉体労働者、貧民、中学未修者、中平、心身障害者、公害病患者、老人、女性、部落民、在日朝鮮人等々——はマルジョア権力によって「労働能力なし」「用なし」「役に立たず」とされ、既に殺つた存在である。就労を制限、拒否され、いつ どんな時でも、一番バカをみるしかない。だから、肉体的生命の死は、その社会的生命の死の追認ではない。

そして、この怒り、怒りを爆発させ、負けつづけてきた。殺人、窃盗、強姦、傷害、暴行、赤貧等の「犯罪」として、また集団「犯罪」となる「暴動」として。そしてその結果（敗北の追認）として、刑務所へぶち込まれ、精神病院に強制入院させられる。

法廷では、犯行の理由を「彼」の個人的性格、動機に求めるマルジョア犯罪学者、心理学者によって、「彼」の「怒り」を仲間のそれと切り離し封じ込める。

「市民」は、その不満を裁判所、行政へお願いし「あなたの場合はこういつことだ」と個々バラバラに処理されておきかめる。

いずれも「怒り」に転化させ結合させることが阻まれているが、下層「持たざる階級」の怒りのぶつけ方は、もっと直接的で、もっと戦闘的で、従って、負ける方向に爆発させた決着は、徹底的に痛めつけられる。その結果には肉体的生命の死も含まれる。

「刑務所はア革命のオー学校である」というのはウソッパチである。多くの階級的兄弟は——階級的報復としての救援体制が確立していない現在——裁判官の前で「すみませんでした」と頭を下げ、何年かつとめあげて出てきてつづやく、「ああ、バカなことをした」と。

4内

しかし、マルジョア権力に「教育」されてしまったわけではなく、爆発をくり返す。

「職歴」転々、前科××犯……ひがみっぽく、乱暴で……」

「怒り」を勝つ方向に、我々の手で、集約組織せねばならない。そして、一日も早く、負けつづけ、殺られつづけている、孤立した、仲間を救援せねばならない。

VI

やがて冬がくる。長く厳しい冬が。敵は総攻撃をかけてくる。釜ヶ崎労働者は孤立し一人一人では、あまりにも微弱でひとまりもない。一人一人で微弱な力を積み重ね、強さをいきだし、団結の力でもって対決せねば勝てない。

——仲間が野たれ死ぬのを目殺しにするのか、否か——。

報復・救援の隊列を整えへ越冬に備えよう。

私たちの路線は、こうである。仲間を死から救うこと、そして「明日はわが身」という感覚——黙っていても野たれ死に、反抗しても地獄、同じ地獄なら腐って地獄——をどれだけ広げな労働者が共有しあえるかである。「みじめ」と「上層へのあこがれ」とを「怒り」へ転化することを、共同で、自己総括（今までの生き方をほりあげ直す）することを通じてやりとげる。

この、互いに腹わって生きざまをさらしあい、自らのコトバを奪い返す中から「世の中を転覆するに」(15)め自分の生き方を確する、そのための場と方式をつくりだし、その場を守り保証する権力をつくり出す作業をすること。やはりやりとおさねばならない。路線の検証者、判定者は、へ下層労働者、大衆である。

VII

私は主張する。マルジョア権力打倒を口にしつる立場を獲得せよ。 ※

※
そうではなければ、爆発するへ怒り」を共有しなければ、これを勝つ方向に転化しない。

「67年全共斗運動へ」専門家「再生産機構解体斗争を自ら、保身のため裏切っていた者——下層人民の利益、学校出でない者の利益をオーにおくのではなく、「私」の利益＝自分の地位をオーにおいて——に對する怒みを共有できない「学生」が「暴動オキ」「軍事」を云々したところで、労働者は腹の底から共有しない。〈大衆の道理を知っている点で「学生」のビラより「西成署防犯コーナー」だより〉のオがまざっている。△「ロレタリア犯罪者」(解放)へ殺られた仲間を生を奪い返す。観点から、拘留所、刑務所、精神病院へ救援(面会、差入、そして……)に向かおう。仲間の死を生かそう。

——彼らは何を求め、何に抗議して死んでいったのか——

一〇月三〇日 中原哲也

※「生活(労働を軸とした・生き方)を今下層人民に依拠する」方向で整える中から、立場感情(怒り・くやしき)をわがものせよ。」

☆ — ☆ — ☆

△活動報告 II・大和中央病院患者新聞発行△

私たち自身、まだ中間総括が出しきれていません。(16)

「新聞」は巻末の△資料II△を参照して下さい。一応、事実経過のみ記録しておこうと思いましたが、担当者書ききれず、別の機会にゆずりたいと思います。最後まで書務をおつという原則を貫けず、中途半端な形となったこと、自己批判します。

11/6 「いのち」編集人